
Toki Uta

雨ル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T o k i U t a

【Nコード】

N 7 5 3 3 D

【作者名】

雨ル

【あらすじ】

いくつもの時が終わり。いくつもの時が始まった。これは田舎町で起こる一つの物語。ただ願うのは誓いを果たすこと。どうか物語の最期には優しい結末を。

序章 詩のはじまり

最果ての記憶はいつだっただろうか。

そこは風がよく吹く場所だった。空が一番近い場所だった。手を広げればどこまでも飛んでいけるような気がした。

憧れはいつも遠くにあった。悲しみはいつも近くにあった。

夕暮れが迫る帰り道。僕らは二人で誓いを立てた。

二人がいつまでも幸せにありますように。いつかまた巡り合えるように。

そして僕たちは別々の道を歩んでいった。

半歩進んだ後に一時の別れを惜しむように、二人は後ろを振り返る。

鳥たちが小さく啼いていた。夕闇が目前まで控えていた。

彼女は憂いを帯びた表情のまま儚げに微笑む。

「……さようなら」

世界から光が無くなると、さっきまでいたはずの彼女の姿が消失する。

初めから何もなかったかのように世界は動いていく。

こみあげてくる涙に耐え切れなかった。

僕は一筋の雫を地面に垂らすと小さく呟いた。

「さようなら」

そして

護れなくてごめんなさい」

T o k i U t a

どこか遠くで僕を呼ぶ声がした。誰なのかはわからない。けれどその声はひどく懐かしく、けれども悲しかった。

その声はまるで何か僕に訴えているように聞こえた。聞き取ろうとして耳を澄ましてみる。しかし僕がいくら耳をそばだてても、

他方からは雑音が響いてくる。

僕が声に意識を向けるほどその雑音は大きいものとなる、しだいにその雑音は大きくなっていくあたかも耳もとで騒がれてるように。そしてその雑音は言語を付加させた。

「……つと。ユウト、優人さん」

誰かの呼ぶ声に意識が反応する。眼を開こうと試みるが眩しすぎる日射に反射的に瞼が下がる。

「もう、まだ起きないんですか」

甘ったるい女性の声だった。僕は困ったような声をあげる女性に覚醒していることを示すために目を閉じたまま起き上がる。

ここでようやく気づいたのだが、僕はどうやら眠っていたらしい。そういえばとふと一つの疑問が浮かび上がると、どうしてだろう。つらつらと様々な疑問が浮かんでくる。

「んっ、……」

僕は自らの存在を忘れていた。それは曖昧なまどろみが霧のように視界を覆うように、目覚めは僕の記憶を忘却の彼方へと誘っていた。

「ここはも、なにもありませんよ。」

「一体いつまで寝てるんですか、しっかりしてください」

徐々に太陽の光に慣れた目を開いてみると、目の前には一人の女性が怒りを隠さずに立っていた。怒っているとは言ってもそれはあからさまな態度であって、本当に怒っているようには見えない。

「ようやく眼をあげましたか。ほらよく見てくださいここどこだかわかりますよね」

そう言つて、僕の前から彼女の姿が消えると、今度は古びた田舎町が広がる。

古き時代に建てられたような家並みが連なり、しかし寂れているようには見えない。

耳を澄まさなくても野鳥や、虫の音が響き渡る。

紅蓮広がる夕空は、ひぐらしの声と相重なつて幻想的な世界を構成する。

そうここは知っていた。いや知らないはずがなかった。

「御曾木町か……。」

「ここが僕の新しい町」

この古びた町も。あの小高い山も。隠されたように建てられた神社も。鎮守の森も。

全部幼いころから知っていた。

ずっと前から、ずっとずっとずっと幼いころから。

「御明答です。」

「じゃあ、私は誰かな」

ああ、そつだ忘れるはずないんだ。

忘れちゃいけないんだ。

なんてバカだったんだろう。

「こより……、樋上 小依里だろ」

こよりが少し笑ったように見えた。
その笑顔が懐かしくて僕も自然と笑みがこぼれる。

「うん、久しぶりだね、日比都 優人さん」

その甘ったるい声色も。

太陽のような笑顔も。

全部懐かしかった。

だからだろうか。

思わず溢れてくる涙の理由。

それはまぎれもなく再会を喜ぶ涙。
けれど少しだけ悲しかったんだ。

「なんで涙がでるのかな。

それにユウトで良いつて言ってるのに」

「なんとなく名字も言いたかったんです。

だってほら、久しぶりですし」

「なんだよそれ」

僕はあふれる涙を手の甲で拭う。

「あー、夕日が眼に染みる」

「ふふ、泣き虫なのは相変わらずなんですネ」

「う、うるさいよ君……」

誰のせいだよと、心の中で悪態をつくど立ち上がる。

どうやら僕はここの町にバスでやって来たまま寝てしまい、いつの間にか終電のバス停に置き去られたらしい。

「首、痛い」

「それは自業自得ですね」

「……はい」

「じゃあ、そろそろ日が暮れてしまいます。行きましようか」

僕が首をぐるぐる回していると、彼女が手を差し伸べる。

若干の恥ずかしさもあったが、こよりに笑顔のまま手を差し出されると、それをむげにするのはかわいそうだと思い、しばしの逡巡のあと手を重ねる。

「じゃ、じゃ行こうか」

少しだけ顔を赤くしながら、歩き出そうとする。

一歩踏み出してつんのめる。

つないだ手に戻されるように引っ張られたのだ。

いや訂正しよう。僕が踏み出したがこよりが動かなかったためバランスを崩したのだ。

「っと、こよりにすんだよ」

「いや、ごめんなさい。

……まさかこの年になって言われたまま手を繋ぐと思わなかった
ので」

「……………ふえ」

「あ、いやなんでもありません。

ほら早く行きましょう」

そう言っただけで彼女は駆け出す。もちろん手は離されている。

「か、からかわれた……………」

僕はその場で小さくなっていると、こよりの姿が見えなくなる。

こよりがいなくなると急に温度が下がったように世界が暮れてい
く。

耳元で響くひぐらしの音が、不気味に響いた。

「ちよ、ちよっと待て。

僕を置いていくなよな」

荷物をつかむと小走りになる。

すぐにこよりの姿を見つける。

「ようこそ……………ソギ町へ」

誰かの呟く声が耳に響く。はつきりとはきこえない。

こよりの声とは似つかない冷たい声色。

しかしそこにはこよりしかいなく、空耳に違いない。

僕はそれ以上気にせず、遠くで手を振ることよりも手を振った。

しかしこの時から、いや物語はすでに始まっていた。

ここはそう幻の眠る地。

御曾木町。

身殺ぎ町。

未だ眠り続ける誓いは夕闇に消え。

未だ果たせぬ約束は空に消え。

ただ、啼き続けるのは時の詩。

それは風が運ぶ調。

もし、叶うなら。

これから起こる物語が平穩にすぎますように。

どうかこの物語が優しく終わりますように。

それは彼しか知らない。

彼にしかできないから。

「どうして、走るんだよ」

「だって、優人さんお腹すいてるでしょ」

「こよりあなの……って」

僕が追いついたと同時に走り出す。

こよりは無邪気に走り回っている。

「ったく」

内心呆れながらも、心は穏やかだった。

「なんなんだろうな」

さつきから響く謎の悲鳴。

意味の持たない記号や旋律が頭を掠める。

それでも穏やかだった。

多分こよりが僕を安心させている。

無邪気なあいつも。笑顔のあいつも。

こよりのすべてが僕を穏やかにした。

僕は立ち止まって眼をつぶる。

風の音がよく聞こえた。

「また、帰って来たんだ」

「そうだよ優人さん。おかえりなさい」

いつのまにかこよりが僕の目の前に立っていた。

胸の奥が熱くなるのを感じる。

ここが僕の還るべき場所のような気がした。

だから呟いた声は新鮮で。

違和感もなく。

温かみがあった。

「ああ、」ゆり。

……「ただいま」

序章 詩のはじまり（後書き）

どうもです。雨ルです。

読んでいただきありがとうございます。

まだ書き始めですので特に感想などはないだろうと思いますが、なにか気付く点があればお願いします。

なんとというか、一つの小説を放棄してこっちに移っちゃいました。

まあこっちも成り行きで書いてますが、春休みと言うこととなるべく執筆していこうと思います。それではまた次回に会いましょう。

……。つーか、ジャンルは恋愛でよいのだろうか？いやきつと大丈夫です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7533d/>

Toki Uta

2010年10月28日07時13分発行